妻たち

（上）

瀬戸内晴美

妻たち（上）

新潮社版

妻たち（上）

昭和40年5月20日印刷
昭和40年5月25日発行

著　者　瀬戸内晴美

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町71
電話(260)1111(大代)
振替 東京808番

印刷・塚田印刷
製本・加藤製本
定価 360円

© 1965 Harumi Setouchi Printed in Japan

目

次

春雷　七
苺　一九
紫陽花　三一
黄薔薇　四四
素足　五六
宝石　七〇
曲がり角　八三
サングラス　九七
遠花火　一〇七
逆潮　一二一
スキャンダル　一三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

誘惑　一四五
いのち　一五八
亀裂　一七二
落葉　一八四
ざくろ　一九七
浮雲　二一〇
ななかまど　二二二
みずうみ　二三五
迷路　二四八
すきま風　二六一

装幀
題簽
川田幹

妻たち（上）

春雷

二丁目の眼鏡店で、夫の庄一郎の眼鏡を受けとると、今日の銀座での用事はすべて終わったことになった。

西原晶子は三丁目の方へ向かって歩きながら和光の時計台を見上げた。まだ三時を十分すぎたばかりだった。思ったより早く買い物は片づいた。

白地に深いお納戸のかすり紬のきものに、同じお納戸に、鮮やかな緑青色で大型亀甲を織りこんだ紬の帯を胸低に巻き、帯締のさび朱できりっとひき締めた晶子のしなやかな姿が、磨きこまれた銀座のウインドウに影を映していく。

咲いたかと思うと、今年の桜もあっという速さで雨に散らされてしまったが、銀座の柳の、さ緑の芽ぶきの勢いは、例年より早い季節の歩みを語っている。

ウインドウの中の色彩は、すでに初夏のすがすがしさにきらめいていた。

気に入ったきもので、ひとりで銀座を歩く愉しさが、無意識に晶子の裾さばきを爽やかにしていた。

博多に嫁いでいる庄一郎の妹の佐規子に、はじめての出産祝いを送ることと、娘の絵美子の通っている画塾の先生小島太一の結婚祝いを選ぶことと、庄一郎の眼鏡が今日の用件だった。

佐規子の子は男の子なので、目の前に来ている初節句用の鎧一式が、佐規子からの注文だったし、庄一郎の眼鏡は、何事にも要心深い庄一郎が、旅行に必ず忘れない予備用を、べっ甲の折り畳式のに注文しておいたものを受け取るだけであった。

小島太一への祝い品が、他の弟子たちの父兄から一任されただけに一番神経を使わせられた。

「小島先生は存じあげていても、わたくしたちの誰も、奥さまになる方をお見かけしたことがないのですから、ほんとに困ってしまいますわねえ。子どもたちのいうことったら、頼りなくってさっぱりわかりませんのよ」

「そうなんですの、うちの和子も、スラックスはいた男刈りのお姉ちゃまをよく見かけるから、あの女だろうなんていうかと思うと、たまきちゃんに聞いたら、時々小島先生と駅前通りで果物なんか買っているきものをきたお姉さんだろうなんていうんですもの」

「小島先生、あれで案外、女の人にもてるんでしょうか。わりあい女のお友だちがいらっしゃるんですね」

絵を習う子たちの母親たちが、昨日、晶子の家に集まって祝い物の相談をした時の会話だった。

晶子もまだ小島太一の婚約者を見かけたこともない。おもしろいのは、昨日の母親たちが、揃って、小島太一の結

婚ということに、不意をつかれたような一種のショックを受け、色めきたっていたことだった。
小島太一の結婚は、いきなり、彼の絵の小さな弟子たちにむかって、
「先生、来月お嫁さんもらうからな」
という形で報告された。何故だか、かまってやらずにいられないような頼りない雰囲気を持った独身の男という共通の印象で、暗黙のうちに、同じ程度の親切とおせっかいで小島太一の身辺を見守っていた主婦たちにも、子どもの口からそっくり太一の言葉で報告されたのである。
さんざん迷ったあげく、アトリエの窓をすっぽりと掩うカーテンに決めたことで、他の主婦たちが満足するだろうかと考えていた晶子は、いきなり名を呼ばれて、ふりむいた。
「やっぱりそうだった」
今、信号で道を渡って来た人々のおびただしい流れの中からかけよってきた若い女が、なつかしそうに晶子に笑いかけた。
小柄な軀にベージュ色の皮のスーツがぴたっとまつわりついている。寸づまりのハート型の愛くるしい顔に、片えくぼが浮かぶ素顔に近いその顔に見覚えはあったが、晶子はとっさに誰だったか思いだせなく微笑があいまいになった。
「忘れはったかしら、木山香澄ですわ」
「まあ香澄ちゃん！　ごめんなさい。あんまりきれいになったから見ちがえてしまって」
「イヤ」
関西弁独特の、意味のない甘い感嘆詞を軽く発して、香澄はきゅっと肩をすぼめた。
「今、東京？」
「いいえ、仕事で四日ほど来てますの、あしたもう帰ります。今、むこうで信号待ちしたら、そのきものがすかっと目に入ってきましたの。いいなあ思って見てたら、晶子さんらしいと気がついて……」
香澄は柔らかな京なまりで標準語を使った。てきぱき、早口なのに、アクセントのせいで、どこかのどかに聞こえる。
人波に押された形で、ふたりは肩を並べ、有楽町の方へ歩きはじめた。
黄と黒のだんだら縞に塗った道路工事現場の板がこいや様々な奇怪な形のクレーンが、道路の両側に我物顔にのさばって、腸をひきずりだしたような醜い道が、埃をまいあげていた。
「汚いなあ、かなん」
香澄は眉をしかめ、甘えるように晶子に軀を押しつけてきた。
晶子は女学校を出たあとの花嫁学校で、香澄の姉の頼江と識りあい、急激に親しくなっていった。二年間の在学中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には、頼江の家族とも親しくなった。頼江の末の妹の香澄のまだ小学生の頃だ。

大阪の船場に嫁いだ頼江が結婚して三年め、子供もないまま、腹膜で急逝してから、木山家との交際もいつとはなくと絶えがちになっていた。最後に晶子が香澄に逢ったのは、まだ今の善福寺の家に移る前、東中野にいた頃で、女子大に入ったという香澄が、ひょっくり訪ねてくれた時だ。

厳格な姑の生きていた頃で、晶子が自分の友だちの妹を接待するのも卑屈なほど気がねしている様子が、若い香澄の目にどう映ったのか、それっきり香澄は晶子を訪ねて来たこともなく、今日まで逢うこともなかった。

「これから、どちらへ」

晶子はお茶でも誘おうかと香澄をみかえった。

「東都ビルの地下の画廊へよるんです。電通の近くだって聞いてるんですけど……ごく最近建ったばかりのビルですって」

「あたしにはさっぱりわからないわ。このごろの銀座は一週間もみないと、どんどん変わるのね」

「よろしかったら、いらっしゃらない？　ブラックの版画がかかってる筈なんです」

香澄の誘いの口調には、晶子の娘時代の絵画への趣味を忘れていない調子があった。晶子も目と肩のあたりなど、次第に頼江に似て見えてくる香澄になつかしさを感じ、別れ難い気になってきた。

そのビルはすぐ見つかった。自動ドアの中に吸いこまれると、外より冷えた空気が、すっと上気した頬にまつわってきた。

画廊は地階にあった。

新しいビル独特の、どこか薬臭いような匂いの空気の中を地階へおりてゆきながら、香澄が晶子に背をむけたまま言った。

「ここで人と待ち合わせしますの。よろしいでしょう？　晶子さんにも逢うといてもらいたいですわ」

「あら、お邪魔じゃなかったのかしら」

「いいんです。そんなんじゃないんです、見ればわかりますわ」

香澄は晶子をふりかえり、くくっと咽喉を鳴らして笑った。

その笑顔が、女の目にもたいそう可愛らしく映り、一瞬、香澄の年が消え、少女っぽく見えた。

――あたしたちとたしか七つか八つちがいだから、香澄はあれで二十四、五歳になっているのだろうか。どうかすると二十くらいに見えるような若々しさは、小柄なせいと、顔立ちの子どもっぽさによるのかもしれない――

晶子はここを探しながら聞いたばかりのテレビのディレクターという香澄の仕事と、香澄の可憐さが結びつかない気持ちで、稚っぽさの残る薄い肩のあたりや、衿足を刈りあげたほっそりした首筋を見おろしながら降りていった。

照明の落ち着いた静かな画廊に、人影は二、三人しかなかった。

ブラックの油絵からはおよそ思いつかない、明るい可愛らしい版画が二十点ばかり壁にかかっている。紫の色がびっくりするほど美しかった。きものの図柄にそのままもらいたいような花や蝶がある。

銀座の画廊をのぞくというような時間を全く忘れきった日常だった。

娘時代、絵が好きで、結婚後も絵を描きつづけさせてくれることを結婚の条件に数えあげたりしていたことが夢のような気がする。

気難しい姑の生きていた間、絵筆はおろか、スケッチブックさえ開くことは出来なかった。姑が死んで後も、そういう気持ちはすっかり失われていた。七つちがいの夫は、同族でやっている建築会社で有能な常務として働いているし、一人娘の絵美子は、誰からも愛される素直な明るい少女に育っている。

一昨年、旧い東中野の家を処分して、先代が買っておいた善福寺にはじめて自分たちで設計した機能的な家も建てた。

世間からみれば申しぶんない幸福な人妻とよばれるのだろう。

晶子は大きな蝶が空中に翅をひろげたように見えるブラックの紫の花をみつめながら、何となく自分の単調な毎日をふりかえるような気持ちになった。

とりたてて不満らしい不満もない毎日だった。女中を一人使いながら、朝、子どもと夫を送りだすことから始まる一日は結構いそがしく、気ぜわしく暮れている。

家が善福寺に移って以来は、夫の仕事上の客もほとんど来なくなったのに、やはり、一家の主婦としての仕事は一向に少なくなったともみえないのはどういうわけだろう。

画廊の清潔さと静寂は海底のようで、この上にあの汚い騒がしい銀座の町があるとも思えない。人々の気配も物静かで水の中の魚がゆらゆら動いていくような感じがする。

軽く肩が叩かれ、

「来たわ」

背後で香澄の弾みを押えた声がした。ふりむいた晶子は目をみはった。

画廊の入口からこっちを見ているのは小島太一だった。

太一の方も晶子を見て愕いた顔をした。香澄はふたりの様子に気づくひまもなく太一の方へかけよっていった。

「時間励行やわ、雨になるのとちがう？」

太一はぼさっとした顔でかすかに笑った。

太一も男としては大きい方ではないけれども百五十糎くらいの香澄と並ぶと、丈高く見える。

折り目もあまりないだぶだぶのズボンに、茶色のウールのワイシャツのボタン一つ外したいつもの姿に、一応ツイードの上衣だけは腕にひっかけている。いつでも素足につ

っかけている百二、三十円のちびた下駄が、今日は靴にかわっている程度で、太一の外出姿は、いつも家のまわりを歩いている時とほとんど同じ無造作だ。

風采の上がらない上に、どこといって取り柄のない顔立ちの中で、二つの目だけが、異様にきらきら輝いているのが、太一の特徴だ。

晶子ははじめて太一に会った時、その目の美しさにまっすぐ見つめられると、思わず、目を伏せずにいられないような気おくれを感じたくらいだった。

そんな太一がどうしてか子どもたちに無類に好かれるところがあった。いつのまにか子どもたちがすっかり太一と仲よしになり、絵の弟子入りをしたがって、親たちはほとんど事後承諾の形で承認させられてしまった。

晶子の近所の幼稚園の子どもから小学生まで十八人くらいが、太一の借りている杉野家の邸内のアトリエへ、裏庭の木戸から出入りしている。

香澄が太一の手をひっぱるようにして、笑いながら晶子の方へよってきた。

「知ってるんですって？」

「娘の絵の先生なのよ」

「あきれた！　今まで太一っちゃんとこへ何度も行っていて、ちっとも気がつかなかったなんて」

「あなたが、小島先生のお嫁さんになるの」

晶子はたった今、そのことに気づいて訊いた。

「ふ、ふ、ふ」

香澄は、ほのかに顔をそめて、照れたように肩をすくめた。小島太一は油気のない髪をぼさりと頬にたらしたまま、のんびりしたいつもの表情で、突ったっている。

「たった今、あなたたちへのお祝いを買いにデパートへ寄ったところなのよ。こんなことなら、あなたたちの御意見をきいてからにすればよかった」

「あらっ、嬉しいわ、何くださるんでしょ」

香澄は無邪気に掌を打って喜んでみせる。

晶子はほほ笑ましくなって、この一見似合わない一組のフィアンセをつくづく瞶めた。

太一はもう、この展覧会は見ているというので揃ってすぐ外に出た。

同じビルの喫茶店に落ち着いて並んで坐っても、太一と香澄はどうもフィアンセという感じはしない。

香澄は晶子ののみものをきいてから、太一のほしいものはわかっているという調子で、改めてききもせず、

「レモンティ一つ、レモンスカッシュ二つ」

と、ウエイトレスにてきぱき注文した。

「もう長いんです、あたしたち。でもあたしのお勤めが関西だし、この人がぐずぐずいうもんだから……押しかけ女房になるのよ」

太一は照れもせず、煙草を吸っていた。その煙草に香澄がさっとマッチをすってやったのが、晶子を愕かせていた。

これから揃って知人を訪ねるというふたりに別れて、晶子が家に帰りついた時は五時をとうにまわっていた。
「ママ！　カナリアが逃げたのよ」
絵美子が目を泣き張らして飛びだしてきた。
晶子に似て一重瞼の目が切れ長な絵美子は、四年生の少女にしては大人びた整いすぎた顔立ちをしている。感受性が強く、神経質な点も、少女の頃の晶子に似ていた。
「鳥籠の扉がへんになってるって、あたし何度もいったでしょ。ママったら、ちっとも本気できいてくれなかったんですもの」
「残念ねえ、でも、ひょっと帰ってくるかもしれないわ」
そんな気休めを絵美子が決して信じないのを知っていて、晶子はなげやりにいって寝室へ入っていった。何となく子どもの相手になるのがおっくうな疲れ方だった。
足袋がすっかり汚れている。銀座をちょっと歩いただけとしては、あきれるほどの汚れ方だった。
「旦那様、今夜お帰りがおそくなられるそうです」
女中のみよ子が、襖の外から声をかけた。
「お電話があったの」
「はあ、奥さまのお帰りの半時間ほど前です」
「そう」
ぬいだ長繻絆の袖口を、疳性にその場でキハツ油でふきとっていると、絵美子が電話だとつげに来た。
「お帰りなさい」
受話器に伝わってくる声は、隣家の篠田志麻のしゃがれたような奇妙に色っぽい声だった。
「たった今、帰ったところ」
「ですってね。今、絵美子ちゃんにきいたわ。今晩、お宅お早いの」
庄一郎が仕事先の招待や接待で、夜のおそくなることが多いのを知っている上での問いだった。
「いいえ、今夜もおそいんですって」
「じゃ、夜、伺ってもいいかしら、ちょっと……」
「どうぞ、お待ちしてますわ」
受話器をおきかけて、
「あ、そうそう、今日小島先生のお嫁さんに銀座で逢ったのよ」
「へえ、それじゃその話もね」
受話器を置くと絵美子が後ろからとびついてきた。もうさっきの泣き顔はけろりとして、
「ママ！　お話しして、どんな人なの、ねえ、小島先生のお嫁さんてどんな人なの」
「それがねえ、昔のママのお友だちの妹さんだったの、大阪の木山香澄さんて……一度うちにきたことあるけど、たぶん絵美子は覚えていないでしょうねえ」
夕飯の支度をしている間に、絵美子の報告で小島太一とフィアンセのデートの話は、たちまち、近所中に伝わってしまっていた。それから三十分ばかり、

「小島先生のお嫁さんにお逢いになったんですって」
という子どもたちの母たちのひっきりなしの電話に悩まされながら、晶子は、太一が彼女たちから、どんなに好意を持たれているかがわかってきた。
夜、八時すぎて訪ねてきた篠田志麻は、晶子からそれをきくなり、湯上がりの照りかえるような頬に、皮肉な笑いをうかべて、いいはなった。
「貞淑な妻たちの欲求不満のはけ口が、一つ減ったということよ。小島太一のようなタイプも一種の現代の女たらしだわ」
真珠色のマニキュアの光る指先で、篠田志麻は煙草を吸いながら、応接間の長椅子に腰を沈め、脚を組んでいた。素脚かと思うほど薄いストッキングの下で金色に漂白されたすね毛が光っている。
ジャージイのワンピースの下からベージュ色のスリップのレースがこぼれていた。
日本人には珍しい長い美しい首を充分意識した姿勢で、志麻はいつでも細い顎を心もちつきあげるようにして人と対する。
近所の主婦たちは、そんな志麻を高慢だとか不遜だとか感じるらしく、評判のいい方ではない。
篠田とだけ書いた標札が出ていた。志麻が普通の人妻ではなく、いわゆる囲われ者だという噂は、半年前、志麻が越して来て、一週間もたたない間に、もうこのあたりでは耳から耳へ伝わっていた。
隣家だということと、晶子のおだやかな人柄と、年かっこうの近いせいなどで、志麻は、はじめから、晶子だけには親愛を示してきて、いつのまにか、旧い友だちのような口のきき方をして、立ちよるようになっている。
志麻の煙草をもった指に、炎のような光を放つメキシコオパールの大粒が、灯をあつめてきらめいていた。
プラチナの台が王冠のように型どられていて、その中で、輝く宝石の光をひときわ、きわだたせている。
「すてきねえ、その指輪」
「うん、これ、ちょっと珍しいほど、質のいい石なの、こんなのって、めったに出るものじゃないから、自分用にしたのよ」
志麻が、指輪や、貴金属の装身具のデザインをしていることを識っているのも、このあたりで、晶子ひとりかもしれなかった。
晶子はそれが、どの程度の収入になるのか訊いてみたこともないけれども、普通のサラリーなどよりは、はるかに大きな収入らしいことは、志麻のことばの端々で察しられるのだった。
晶子は、じぶんから志麻の身の上とか、生活とかを聞きだそうとしたことはない。
志麻も、時々訪れる車の主のことについては、いっさい晶子の前で語らなかった。

晶子が小島太一のフィアンセが自分の友人の妹だった愕きを話すと、志麻は、神経質そうに、まだ二口ほどしか吸わないケントを灰皿にこすりつけ、
「これだけは外れたかな」
と、小首をかしげた。
「なあに？」
「ふふ、いえばあなた怒るにきまってる」
「あら、何よ、気持ちが悪いわ、おっしゃって」
「太一くんはね、あたしの観察じゃ、あなたに惚れこんでるとばかり思ってたのよ」
「何ですって」
晶子は、呆れたようにぽかんとした表情になった。あんまり唐突に思いがけないことを聞かされて、志麻のいっている意味が伝わらない。
「今までいう必要もないと思っていわなかったけど、あたしは彼のアトリエにわりと遊びにいってるのよ。知らなかったでしょ」
「知らなかったわ」
「いつか善福寺で写生している彼の絵を散歩の時見ていて、彼にお小遣かせぎのアルバイトさせてやりたくなったの、それで、訪ねていったのよ」
ある晴れた日の午後、志麻は散歩のついでに、二丁ばかり離れている小島太一のアトリエへふらりと訪ねていった。

大家の老夫婦が溺愛した末息子のためにたてたアトリエは、その青年が夭逝して以来、手入れもされないまま、何年も閉ざされていたので、相当旧び、傷んでいた。けれども定職もない、売れない貧乏画家のアトリエとしては、勿体ないほど採光にも恵まれ、材質もいい、しっかりした建物だった。
子どもたちのためにいつでもあけ放しになっているらしい裏木戸の内には、連翹の花が黄金色の花をたわわにつけ、まばゆいような花明かりをゆるがせ、入ってくる者の脚に甘えた。
スラックスにブラウスという軽装の志麻が、大股にアトリエに近づくと、開け放ったアトリエの窓から小島太一が首をだし、びっくりしたような目をみはった。
先日、池のほとりで太一の写生をずいぶん長い間無躾けにみながら、話しかけ、住所まできいていたので、太一の方も志麻を覚えている。
「こんちは」
「いらっしゃい」
志麻は自分流のやり方で、上がっていいかなど訊きもせず、さっさと上がりこんでいった。
乱雑な床のすみの長椅子を、太一はこの美しい女客にすすめた。
志麻が腰をおろすと、バネのすっかりのびてしまった椅子は、ずしんと沈みこみ、思わず志麻の両脚が宙にはね上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com